点から始まるプロジェクト:専題制作の取り組みについて

～国立臺中科技大学応用日本語学科の場合～

堂坂順子

1．はじめに

国立臺中科技大学応用日本語学科(以下、本学科と称する)の教育理念は、学生が日本語と英語及びビジネス知識を身につけ、これらの能力を社会で実践的に応用し即戦力を持った人材を育成することである。この教育目標を掲げて 1970 年に「応用日本語」という学科が台湾で最初に本学に設立された。本学科の大学部は五専、二技、四技という三つのプログラムから構成されており、五専から二技の七年間の日本語学習の「応用」、集大成として現在「専題制作」(卒業制作や卒業論文のこと)は二技の課程で必修となっている。本稿ではこの二技の「専題制作」について5つの観点(理念、経緯、現況、実践上の課題、今後の展望)から考察していきたいと思う。次の項では、本学科の専題制作の理念とその経緯から説明していくことにする。

2．専題制作の理念と必修となった経緯について

本学科の専題制作における理念とは「応用日本語学科」の教育目標でもあるが、学生が実務と専門技能を習得し今まで学んだことを自分なりに統括、応用し分析できて、企画能力を養成することである。これは Bloom(1956)の taxonomy of learning domains(学習領域の分類学)の理論を反映している。Bloom によると、教育的行動には三つの領域(認知、情意、技能)があり、認知領域における学習はあるテーマを軸に知識や理解と批判的思考(critical thinking)が回転しているという。認知領域の分類は下記の6段階あり、学習過程のレベルが低いものから高いものの順に構成されている。

高	Creating (創造)	さまざまな要素からひとつの構造やパターンを作り出す。新しい意味や構造を作ることを強調しながらひとつひとつの部分的要素を組み合わせて全体像を作る
	Evaluating(評価)	材料や情報の価値を評価する
	Analyzing（分析）	組織的な構造が理解できるように材料や概念を構成要素に分解する
	Applying(応用)	新しい状況において概念を用いる。教室でそれまで学んだことを職場で新たな状況に応用する
	Understanding(理解)	まとめや比較、解釈などを通して事実や考えの理解の提示
低	Remembering(知識)	それまで学んできたことの記憶

(Bloom's taxonomy of learning domains http://www.nwlink.com/~donclark/hrd/bloom.html)
（注釈:堂坂）

学生は興味あるテーマを決め、「専題制作」の過程でこれらすべての学習スキルを応用し、特に一番高度なレベルの creating(創造)を駆使して指導教授と共に一年に及ぶこのプロジェクトに取り組む。

ここで本学科の専題制作が必修に至るまでの経緯について触れておきたいと思う。このプロジェクトの取り組みは上記の理念のもと、五専と二技の計七年間の応用日本語学科での学習の集大成を担う卒業必修科目として、民国97年度二技部三年生を対象に始まった。その後、民国98年度も同様に取り組んだが、翌年はこの科目がなくなってしまった。その要因は二つ挙げられる。第一に、カリキュラムの改定により、本学科の教育目標は日本語、英語とビジネス知識の習得という、三位一体の方向性を強化したため、学生にとって学ばなければならない科目数が大幅に増加してしまった。また第二の要因として、卒業履修単位(二技)が今まで82単位であったのが、逐年で72単位減らさなくてはならないことになり、その結果、民国99年度は専題制作の単位が削除されてしまったのである。しかし、この科目は民国100年度から再び復活することとなった。それは教育部(日本の文部科学省に該当する)の方針で、この科目を積極的に取り入れることを推奨され、また他大学でも取り組む方向が示されたためである。では、その復活の経緯について詳しく説明したいと思う。

民国99年度「高等教育評鑑中心」(台湾の高等教育機関の査定を行うセンター)から教育部の「技職再造方案」に従い、職業系の学校の査察である方向性が提示された。それは、直接指

標と間接指標という二つの指標から構成されておりその中で、直接指標に分類されている要素の一つで近年一段と重要視されるようになったのが、「課程實作」(卒業専題のようなもの)だと記されている。つまり、卒業制作や卒業論文なるものが学生の核心能力を評価する証拠の一つである、という判断がされるようになったのである。

このように学生の制作したものが重要視されるようになった経緯には三つの大きな理由が挙げられる。第一点は、本大学は現在国立臺中科技大学という名称であるが、その出発点は台中商業専科学校(通称、台中商専)であり、その後国立台中技術学院となり、民国100年12月から現在の科技大学の名称になった経緯があり、本大学の歴史は学生の専門技能を培う教育とともにある。従って、本大学は技術、職業系の大学と位置づけられているのである。第二点は台湾の教育部の査定の照準が変わったことである。以前は「教師が教える」つまり、教師主体であったのが、今は「学生が学ぶ」、学生主体へと移行したのである。そのことにより、現在の査定では学習の導入とそのプロセスを重んじるのではなく、学生の学習成果が重要視されるようになった。学生の核心能力を評価する直接的、つまり第一義的な素材(根拠となるもの)が学生の作成した卒業制作なのである。

最後にこういった経緯をふまえ、教育部の査定照準が変わったことにより、本学科としてもカリキュラムを改定しないと学生が社会に出たときに競争力に勝てない可能性があることを懸念し、学科自体でこれまでのカリキュラムを振り返り再検討してみたところ、「専題制作」の科目に本気で取り組む、学生のためになる、ということで復活が決定したのである。そして、本学科の四技のプログラムでも民国102年度から四技三年生の課程でこの科目を必修とすることになった。以上の「専題制作」における理念とその経緯をふまえた上で、現況について次の項で考察したいと思う。

3. 「専題制作」の現況について

前述にもあるように、本学科では民国97年度から二技部の学生にこのプロジェクトを課しているのであるが、学生は三年生の第二学期と四年生の第一学期の計一年で専題制作を完成させることになっている。学生は四年生第一学期の終わりに「期末発表」を行い、その後必要ならば加筆修正をして提出しプロジェクト修了となる。これはグループ制作であるので、学生た

ちは五人前後で一つのグループを形成し、指導教授を自分たちで決めてこのプロジェクトにとりかかる。

それでは、今まで学生たちがどのようなテーマで取り組んできたのかについて紹介したい。民国97、98、100年度の「専題制作」のテーマは下記の通りである。

	民国97年度の専題制作のテーマ
グループ1	台湾ではどうして日本語を使用した包装商品がよく売れるのか
グループ2	無店舗販売及び実店舗の経営戦略の調査について
グループ3	和製外来語と新語
グループ4	児童文学研究
グループ5	台湾女性と日本女性のイメージの比較
グループ6	日本芸妓の研究
グループ7	日本語初級会話教材開発 ぐるっと一周山手線からはじめよう！―日本語会話(学習)―
グループ8	日本語誤用の現況研究

	民国98年度の専題制作のテーマ
グループ1	インターネット時代の食品業市場の消費形態と未来の傾向の探求
グループ2	ことわざ学習教材開発
グループ3	日本の低炭素政策と経済・産業発展
グループ4	台湾社会に対する草食系の影響
グループ5	日本語の方言―大阪弁実務書作成
グループ6	外来語の略語図解辞典の制作
グループ7	日本一すし職人と台湾の有名な日本料理人の労働観の比較分析

	民国100年度の専題制作のテーマ
グループ1	「自然」に関する日本語四字熟語
グループ2	江戸時代における一般庶民の女性像 ～どのような社会的立場にいたのか～
グループ3	「告白」における少年殺人:法律と実態の矛盾
グループ4	小説と映画との違いー松本清張の『砂の器』から
グループ5	女子高校生のいじめ:「ライフ」と現実の比較
グループ6	台中市における高齢労働者の活用:日本の経験を例として
グループ7	応用日本語学科と日本語学科学生の学習効果についての一考察
グループ8	日本人の笑いのツボの研究―日本語学習者に『言葉の笑い』をどう教えるか？

以上のように、学生が取り組んだテーマは言語、日本語教育、日本文化、文学、経済、社会問題、労働問題など、多岐にわたっている。指導する方も必ずしも自分の専門分野を担当するわけではないが、自分の研究や関連知識を駆使して指導にあたっている。

ここで「専題制作」の取り組みについて具体的に説明するために、私が指導してきた三つの制作について考察したい。まず民国97年度において、初級日本語会話の教材開発を指導した。学生は「勉強した文法を自由に使えて日本人と楽しく会話できる」教材を作りたいと言った。そこで、彼らは外国語教育の主流であるコミュニカテイブアプローチとアメリカの外国語教育の基準となっている５Ｃの概念（Communication, Culture, Connections, Comparisons, Communities）を反映させた初級教材（テキストとＣＤ）を制作するため、まず学習者のニーズを探るアンケート調査及び分析を行い、そこから出てきたアイデアを軸に東京山手線を一周しながら基礎会話と、その土地の文化や風習も学べる教材を制作した。学生は各課の会話やさまざまな練習問題、四コママンガや表紙の絵を作成し、ＣＤで会話の録音を行った。しかし、全く教えた経験がない彼らの最大のチャレンジは教授法の学習も教材作成も初めてだったことだ。そこで、外国語教授法の説明、コミュニカテイブアプローチを理解してもらうため私が教えている初級会話クラスの参観、様々な教材の比較検討や、実際に学生が作成した会話や練習

問題をコミュニカテイブアプローチや5Cの概念が反映されるための指導も行った。Vygotsky の Zone of Proximal Development (ZDP=最近接発達領域)のように、先に理解した学生がパイプ役となってグループ全体の理解を促す潤滑油となり、みんなのチームワークで世界に一つだけの教材が誕生した。

次に民国98年度の卒業制作での担当はすし職人の労働観というテーマであった。このグループが最初に提示した案は日本食についてであった。漠然と伝統的な料理を提案したが、そこから卒業制作の研究テーマにどう発展させていくかが最初の課題となった。なお、この問題提起のプロセスについては後の項で説明したい。学生の考えをいろいろと聞き、討論した結果、最終的に「日本のすし職人と台湾のすし職人の労働観の比較」にしたいということになった。

次の課題は資料収集をどうするかであった。学生に提案したのはケーススタデイをしてみたらどうだろうかということだった。まず、インタビューをしてそこから課題を見つけ、それに応じた文献を探し、自分たちの探求している問題の答えを探ろうというのだ。学生たちも最初は戸惑いを隠せなかったが、やるしかない、ということで取り組むことになった。まず台中で有名な日本料理店のすし職人さんにインタビューしてみようということになった。

次に日本のすし職人にもインタビューしたり、労働観に関する資料を収集することになった。しかし、ここで壁にぶつかった。問題はどうやって日本のすし職人を探すか、ということであった。私も学生もすし職人を全く知らない。そこで学生に提案したのが、以前見たＮＨＫの「プロフェッショナル仕事人」で取り上げられた小野二郎さんに自分たちの卒業制作の主旨を説明して、質問を手紙に託してみる、という方法であった。小野二郎さんは東京の数寄屋橋で長年すし職人として店を構え、2008年11月にフランスの権威あるレストランガイドブック、「ミシェランガイド東京2008」において最高評価の三ツ星を獲得され、日本一、また世界一のすし職人と称された方である。その小野さんに「当たってくだけろ！」の精神で学生たちは心を込めて日本語で手紙を書いた。私は学生の一生懸命さが小野さん伝わってくれれば、と願いながら見守っていた。

ある日小野さんから返事が届き、その簡潔に要点をおさえるように書かれた手紙は小野さんの職人気質が垣間見られ、末筆に「来日の際には是非来店していただき本物のすしを召し上がることをお勧めします」と記されてあった。お返事をいただけたことだけでも学生たちは

飛び上がるほどうれしかったのだが、さらに小野さんはご自身の著書も送ってくださるという二重の喜びに、学生たちは小野さんの心意気に感謝し、卒業制作をやり遂げようという意欲が高まったように思う。学生はお礼に台湾のお菓子を送り、再度質問の手紙を出し、小野さんからまたお返事をいただくという交流ができた。

卒業制作の最初の学期が終わった後の夏休みに、メンバーの一人が自分の目で本物のすしを確かめてみたい、と東京に行った。学生は事前に予約電話をし店内の写真撮影の許可ももらって、当日「すきやばし次郎」に足を運んだ。緊張してなかなか店内に入れずにいたところ、店内から小野さんの息子さんが声をかけてくださり、やがて小野さんご自身が学生の目の前で食べるタイミングを見計らいながら、さりげなくすしを次々と握って出して下さったそうである。にぎりずしコースと巻物、メロンまでごちそうになった時、小野さんがそっと学生の横にすわられ、「一緒に写真をとりましょう」と言ってくださり、ツーショット写真を撮らせてもらい、職人さんの「手」を見せてもらい、お話を伺い、帰り際小野さんは息子さんと二人で、学生の後ろ姿が見えなくなるまでずっと手をふって見送って下さったそうだ。小野さんの真のおもてなしの心遣いを感じた学生はこの時思わず涙がでそうになった、と言っていた。

学生は卒業制作を通じて、小野さんという日本一のすし職人の仕事ぶりをつぶさに観察させていただき、直接お話を伺い、手紙の交流を通して労働観を学ぶという大変ありがたく、かつ貴重な機会をいただいた。単に研究課題を資料から学ぶだけでなく、日本の方と直接交流ができたことは学生にとって、目上の方への日本語での手紙の書き方、話し方、礼儀正しい態度など、学問と日本語学習の応用という両面から教室だけでは学べない価値観も体験学習することができ、これぞ卒業制作の醍醐味ではないだろうかと感じた。

最後に民国100年度の卒業制作について述べたいと思う。テーマは江戸時代の一般庶民の女性像についてである。最初、女性5人グループの彼女たちは漠然と「浮世絵」について興味がある、と言った。しかし、学生は「浮世絵」の何を具体的なテーマとしてこの研究に取り組むかというところは自分たちでさえもなかなか見えてこない。そこで、どうして「浮世絵」なのか、というところから問題提起の開拓が始まった。彼女たちの話から出たキーワードは「江戸時代」と「女性」であった。以前彼女たちが見たＮＨＫの大河ドラマ「篤姫」は女性でありながら、将軍にも自分の意見をはっきりと述べる姿勢に驚嘆したという。なぜなら、彼女たちの日本女性のイメージは従順に従う人、であったらしい。しかし、このドラマを見てイメージが一変したという。そこ

で沸いてきた疑問は当時の一般女性も「篤姫」のように強かったのか？ということだった。ならば当時の一般女性の社会的立場を理解したい、とこのテーマになった。しかし、いざ資料収集の段階になると、台湾には江戸時代の女性に関する資料があまりないということがわかった。そこで、学生は東京の江戸東京博物館の館長さんに手紙を書いてみたのだが、残念ながら返事はもらえなかった。夏休みにメンバー2 人が千葉のホテル実習に行ったので、その際にこの博物館に行って資料収集することとなった。その後、学生は江戸の古文書に詳しい日本の大学教授にEメールで質問を送ってみたのだが、やはり返事はもらえなかった。学生は日本で本を購入したり、台中の他大学の図書館に何度も足を運んで、一生懸命に資料を探し今回の卒業論文を完成させた。私も指導を通して学生と一緒に江戸時代の女性像について視野を広げることができ大変興味深かった。

以上、私が担当した三つの卒業制作(論文)について述べてきたが、次に指導者の役割について考察した課題、三点について討論したいと思う。それは、1)問題提起の導き方、2)未経験者へのアプローチ、3)学生主体のプロジェクトへ、である。

３．１．問題提起の導き方

前述にもあるように、学生はただ漠然としたアイデアを持って私のところへ来る。この段階での私の役割は影の進行役である。学生が単語でしか発しない言葉をつむぎ合わせたり、別の角度から物事を捉えることを促したり、学生の考えをあの手この手で引き出し、Krashen (1987)の「*i*+1」の理論を応用し、学生の現レベルより少しチャレンジングな研究課題になるよう導くことが討論の影の進行役だと思っている。

すし職人をテーマにした卒業制作の場合を例にとると、いろいろな日本の伝統料理の中から、学生たちは「すし」について取り組みたいと言った。「すし」の何に興味があるのか掘り下げて聞くと、歴史を知りたいという。そこで、「歴史」をキーワードに、江戸時代にはすでにファーストフードとして人気を博した「すし」から、現在の「すし」までを学生と考えてみた。

「すし」という食べ物は時代を超え、いまや国境を越えて「すし、寿司、SUSHI」とたくみに変化しながら、世界中の人々の心をつかんでいることに気づいた。ということは今や日本人だけの「すし」ではなく、世界でいろいろな人が「SUSHI」を握っているというわけである。そこで学生との討論で出てきたキーワードが「仕事に対する姿勢」だった。彼らは「日本人は仕事に対し

て責任感が強い」というイメージを持っていると語った。よく耳にする言葉に「この道一筋〇〇年」があるという。これは一つのことを忍耐強くがんばり、道を極めようとする日本人の仕事に徹する姿勢がうかがえるという。そういう姿勢を尊敬するという彼らに提案したのは、すし職人の労働観を考えてみてはどうか、というものだった。日本で誕生した「すし」が国境を越えて「寿司、SUSHI」となるためには、そこの国の人々、文化に適合しなくてはならない。だからこそ、アメリカではカリフォルニアロールが発案されたのであり、台湾では酢飯を使わないで具材も肉鬆(豚肉のデンプ)やとうもろこし、中にはマンゴーを入れた寿司までバラエテイーに富んだ「寿司」が食べられている。

では、それぞれの国ですしを握る職人の労働観も日本と同じなのだろうか？という問題を提起してみた。日本では一人前のすし職人になるためには必ず「修行」の期間を乗り越えなければならない。この「修行」という考えは日本独自の労働観の一要素、特色なのではないだろうか、また、外国ではこの要素がどのように捉えられているのか、または変化しているのか、ということを話し合った。学生はこの「労働観」という言葉に興味を示し、自分たちの好きな「すし」と組み合わせて、彼らの卒業制作のテーマが決定したのである。

研究テーマを決めるプロセスの中で、私が学生に確認する大切な指標が二つある。それは、1)なぜこの研究テーマを探求したいのか、2)この研究結果をどう役立てたいのか、である。第一の指標は研究動機であり、卒業制作の問題提起をする重要な部分であり、研究の出発点でもある。第二は卒業制作の今後の展望の部分である。つまり、学生にとって研究のゴール(到達点)であり、応用である。ここを明確に認識できないと、卒業制作の方向性がぶれたり、違う方向に反れてしまったりして、学生は出口の見えない迷路に迷い込むということになりかねない。一年の指導の中で、私は学生に折に触れて研究の出発地点と着地地点を再認識してもらうことを強調する。

学生の専攻は「応用日本語」であって、ある特定の専門分野の知識を学んだわけではない。それまでの授業でアメリカの大学生のように毎学期自分で研究テーマを決めて research paper を書く、という経験もほとんどないと思われる。唯一あるのがレポートを書いた経験であるが、ミニ研究論文的なものに取り組んだ作業経験がないのが現状ではないだろうか。学生にとって自分で研究テーマを見つけだすことはチャレンジである。次の項では、そういう未経験学習者に対する指導のアプローチについて述べたいと思う。

３．２．未経験者への指導アプローチ：「点」から「線」へ「線」から「線」へ

テーマが決まりプロジェクトに本格的に取り組むようになると、私は進行役から家庭教師のような役割に転ずる。卒業制作はグループで行うが、 個人個人の分担作業から成り立っており分担は学生が決める。指導はグループ全体と個別指導の二重構造となる。学生にはまず卒業制作の取り組み方、論文の構成と書き方、資料収集のしかた、まとめ方、分析方法、文法など、学生の状況や遭遇する問題点に応じて指導をする。プロジェクトも佳境に入り、学生が論文を書き始めると各章のつながりや論文全体のまとめ方、結論の導き方などを指導する。この時に確認するキーワードがある。それは、「点」と「線」そして、「線」と「線」である。

学生にとって膨大な資料をまとめるという作業は容易でなない。ましてや日本語で書かれた資料の内容を理解するだけでも時にはチャレンジであろう。その上、それらの資料を外国語である日本語でまとめなければならないのである。学生は目先の言葉（点）に捕われてしまい、研究テーマとの関連性や方向性（線）を見失いやすい。それ故、学生に意識してもらうことは物事を「点」と「線」で捉えることである。今、この章で必要だと思った資料は研究全体においてどう位置づけるのか、どのように関連づけできるのか、を念頭におくことは研究の方向性を見失わないために大変重要であると思われる。

３．３．学生主体のプロジェクトへ

「専題制作」は学生の学習成果を示すプロジェクトである。それ故、学生主体なのであり、教師は学生のサポーター兼ガイド役であることが理想だろうと思う。これは学習理論であるConstructivism (構成主義)にも反映されている。 この理論では教師の役割は教えるのではなく facilitator(進行役)であるべきだと説明している。学生が積極的に学習のイニシアテイブをとり、自分で既存の知識と新情報を結びつけて新たな知識を構築していくのである。教師は学生の学習をサポートしガイドすることが求められる。

そこで、学生にはしっかりした計画表を立てることと自分で現場に足を運んで学ぶ、hands-on experience（実務経験:ニーズ分析、インタビュー、博物館見学、手紙を書くなど）を勧める。これは、自分たちで取り組むという意識を強く持ってもらうためと既存の知識を応用して

新たな発見を学びとるためである。卒業制作は往々にして、なかなか予定通りに研究が進まないものである。そういう時は、学生に進捗状況を自己評価してもらう。今、何をしなければならないのか、また計画をどのように調整すればよいのか、どうすれば研究のプロセスを進めることができるのか、など自分たちの取り組んできたことを過去、現在、未来で捉えて討論してもらい、つねにメタ認知の学習ストラテジー（自分の学習計画や成果を評価する）を働かせてもらうようにしている。なぜなら Oxford (1990)によると、学習ストラテジーは–自律した学習、より意義ある学習の重要な鍵となるからだ。学生は私とのミーテイング終了後も自分たちだけでの討論や、グループミーテイングを積極的に行っていた。こういう自律した学習態度は学生主体のプロジェクトには必須だ。学生は指導教授に頼らずとも自分たちで取り組む自主性が生まれる。従って、私はできるだけ学生のサポーター兼ガイド役となって学生のプロジェクトを見守るのが役目だと考えている。Oxford (1990:10)も近年の教師の役割の変化を“facilitator, helper, guide, consultant, adviser, coordinator, idea person, diagnostician, and co-communicator”だと述べている。

以上、私の指導上の課題を述べたが,「専題制作」の実践上の課題を探るため、民国 100 年度の卒業制作にたずさわった指導教授と二技四年生にアンケート調査を行なった。 次の項ではその結果報告を述べたいと思う。

４．実践上の課題について

2012年12月から2013年1月にかけて、指導教授5名（内4名回答）と二技四年生37名（内29名回答）に自由回答形式のアンケート調査を行い、教授2名にはインタビューを、10名の学生には追加質問を E メールで行った。指導教授の回答から浮かび上がった課題は三点、学生の指摘した課題も三点であった。まず、指導の課題三点は、1）学生の態度、2）グループ指導のプラス点とマイナス点、3）サポートの必要性である。ではまず、1）学生の態度から考察したい。

４．１．指導の課題

１）学生の態度

本学科ではグループでこのプロジェクトに取り組むが、完成要素の一因に グループの団結性がある。しかし、これには三つの問題が関係することもある。一点目は学生の積極性、責任感、日本語能力に大きな差がある場合である。例えばグループ内でプロジェクトに取り組む姿勢に対して積極的な学生と消極的な学生がいる場合、積極点な学生が大部分を担う傾向もあるので、指導教授として消極的な学生をどう自主的に取り組んでもらうよう導くかは課題である。それ故、学生一人一人が役割を担うことも重要である。

二点目は学生の人間関係である。最初は仲良く作業をしていても、一年かけて完成させるプロジェクトはストレスも多い。アンケート調査の中である指導教授はグループで行うことの難しさを指摘されている。それはまとまりのあるグループとそうでないグループが一目瞭然だというのだ。学生の人間関係が途中で空中分解してしまうことも懸念されていた。グループ内のまとまりがなくなってくると、指導教授としてどのように公平感を失わせずにゴールに到達してもらうか、を考慮されていた。ある教授の試みは学生たちと一緒に日本料理を作って、関係の改善を図られるそうだ。

最後の問題点はグループ全体が受け身な態度の場合である。ある指導教授は「自分から研究をしようとしない。いつも待っているような感じだ」と述べておられる。また、別の指導教授は「学生がわからなくなったときに、学生の自主的な考えを引き出せなくなり、代わりに私の出した意見や考えが採用されてしまうことがあり、学生を甘えさせないようにするのが大変」だったと回答された。このようにグループが受け身な態度の傾向が強かったり、そうでなくとも、指導の際に学生の自発的な考え、意見をいかに引き出していくことが時としてチャレンジとなるかを物語っていると思われる。学生は未知の分野に飛び込み暗中模索の中にあって、自分の意見を持つことは難しいことなのだろうが、学生に積極的に取り組んでもらうよう指導することも時にはチャレンジである。

2）グループ指導のプラス点とマイナス点

まずグループ指導のプラス点として、ある教授は「文法チェックなどが大変なので、グループで一つのことをやるほうが教師の目が届く。」そして、少人数指導なので、「小グループで討論しているのを聞いて、何が問題かわかる。教室にいると25人の学生だとできないが」ということをあげておられる。また、他の教授も「学生たちと学生たちが選んだ一つの問題について深く話し合えたのがよいと思った。少人数の指導なので、普段の授業より一人一人をくわしく指導できるのもよい点だ」と述べておられる。通常授業とは異なり、少人数指導で深く詳しく指導できる点がプラスになっている。

一方でグループ指導のマイナス点もある。これは前の学生の態度と関係しているが、グループ内の積極的な姿勢やまとまりが失われると専題制作の完成に辿り着けなくなるので学生の精神面のケアも考慮する必要があり、いかに学生のモテイベーションを維持するかも重要課題である。

3）サポートの必要性

ほとんどの教授がサポートの必要性を指摘しておられた。それは「『研究方法』という科目を設置したほうがよい」、という意見だった。ある教授は「二技では研究方法という科目はない。学生は研究の流れや方法はあまり知らないから、指導の時大変だった。」と指摘されている。以前この授業は開講されていたが、カリキュラムの改訂により削除されたと思われる。では、新たに開講すれば解決できると思われるが実際は簡単なことではないのである。先にも述べたように、教育部から授業時間数を逐年で減らすよう求められているため、新科目を設けることは事実上不可能な状態にある。従って、改善策は現存している授業（例、作文）と連動させて学生に専題制作の準備ができるようにするなど、他科目との連携が重要になるのではないだろうか。以上、指導する側からの課題を述べてきたが、学生たちは何を課題だと考えるのだろうか。次に、学生の声を考察したいと思う。

４．２．学生からみた課題

アンケート調査の結果、浮かび上がった学生側の課題は言語面と心理面の三点、1)論文を書く難しさ、2)資料、3)精神面である。ではそれぞれについて考察したいと思う。

１）論文を書く難しさ

多くの学生は第二言語としての日本語で論文を書く難しさを指摘している。 ある学生は「非常に難しいと思った。実験の方法と分析とその結果がもともと複雑なので、さらにそれを日本語で説明するのが本当に難しくて、脳細胞がたくさん死んでしまう気がした」、とその困難さを説明している。別の学生は「頭で考えることをそのまま日本語で文字化するのが難しいと感じた」と書いている。また、93％の学生が日本語と中国語で書く場合は違うと答えている。Wang(2012)の研究でもL1(学習者の母国語)とL2(第二言語)で書く場合の違いを指摘している。ある学生は「日本語で書くときはいつも自分の考えをうまく書けない」と述べている。

ここで浮かび上がった言語面での課題で、多くの学生があげたのが日本語と中国語の違い、つまり文法、語彙、表現方法、文の構成、ニュアンスの違いである。Giridharan and Robson (2011)の研究でもESL学習者のacademic writingで自己評価と教師の評価に大きな違いがあり、共通の文法上のミスがあると指摘している。特に文法においては、日本語の動詞の過去形と現在形の使い方の混乱や、語順の違い、「であろう」という曖昧な表現が多いと指摘している学生もいた。また、専門用語の言い方や日本語の話し言葉と書き言葉の区別に戸惑った学生もいた。「日本語を応用する」という部分でさまざまな言語面での困難に直面した学生が多かったが、その分完成させることができた充実感や達成感はひとしおだったようだ。ある学生は「つらくて、眠くて、疲れきって、体もちょっと壊したけど、やっぱりいろいろと勉強したので、ずいぶん成長し、一皮むけた感じだ」と心境を表している。

２）資料について

約45％の学生が資料収集の困難さや、資料を探して内容を理解し、自分の考えをまとめる難しさを指摘している。ある学生は大変だったことや難しかったことは何かという質問に対して、

文献を探すこと(中略)。文献を探す方法は最初ただ Google しか使わないからあまりいい結果が出てこないので、先生が論文を探す方法を教えてくれて、いろんな役立つ文献が増えた。また、これらの文献を読んだあと、自分の言葉で章節を書くのは大変だと思った。

と書いている。このことは本大学の図書館に資料がない場合が多いことや、学生のテーマが特殊な場合もあり、また、学生が資料収集のしかたやまとめることに慣れていないことが要因ではないかと考えられる。

3）精神面について

学生のほとんどが精神面(不安、挫折、つらさ、そして達成感)について述べている。どういう時に不安、挫折、つらさを感じたかというと、「一つの壁をやっと超えた時またさらに大きい壁がそこにあって」という場合や、「資料と考えがなかった時、挫折しそうになった」「テーマを決定できない時は本当に不安になった。そして、資料を探せない時もすごくイライラした。」「卒業制作を通して、自分の日本語の程度がよくわかった。楽しかったときもあるけど、挫折感もどんどん感じた。」「自分が書いたものを何度も指導教師に否定されるたび、挫折しそうになる。グループの人が協力しないたびにイライラする。」このように、学生が不安や挫折を味わうのは自分の思うように物事が進まない時である。学生は外国語である日本語で書くこと自体に大きなチャレンジをすでに感じており、日本語で思うように自己表現できないことに不安を感じ、それが自信喪失の原因にもなっているのである。ある学生は「私は中国語で書くのは自信がある。(中略)でも今回の卒業制作で初めて論文の形で書いて、日本語の表現が不慣れで、書いていた時いつも不安で心細く書いた。自信はなかった。」と回答している。第二言語で書く学生の writing anxiety などの心理面も考慮し指導する必要があると思われる。

卒業制作は学生の心理要素も大きく影響し、学習ストラテジー(Oxford, 1990)とモテイベーションとも深く関係している。制作を完成させるためには六つの学習ストラテジーの中でも特に affective strategies(情意ストラテジー)が大きく影響すると思われる。このストラテジーは不安感を和らげたり、自分を励ましたり、自分の気持ちを客観的に見つめる、という要素である。自分を励ます、という要素には指導教授からの褒め言葉も大きく関係するであろう。「学生を励ま

す、褒める」ということによって、学生はモテイベーションを上げて前向きに取り組めるようになるのでないだろうか。指導者も学生の情意を考慮して取り組む必要があると思われる。

学生が精神的につらくなった時には、グループメンバーとの協力関係やお互いを支え合う気持ちから不安を乗り越えていたようである。これは Oxford が指摘する social strategies（社会的ストラテジー：質問、他者との協力、共感）を反映している。学生は無意識のうちにこのストラテジーを巧みに駆使し、共通の目標に向かうための努力する気持ちが学生のモテイベーションを支えていたのであろう。アンケート調査でも「指導の先生といろいろ交流して、会話ができるのが楽しかった」「疲れたけど、同じ組のクラスメート関係がよくなった」「グループのみんなと一緒に頑張って卒業制作を作る時、本当に楽しかった」「クラスメートや指導先生と一緒に話し合って、問題を解決してそのプロセスは楽しかった」と回答している。

ある学生は「卒業制作を通して、自分の日本語能力とか、研究能力とかよいトレーニングだと思っていた。途中でつらいこともあったけど、克服したら成長させるってずっとそう思っていた」と書いている。これは Dörnyei(2009)の L2 motivational self system を反映している。第二言語学習者は理想の自分とあるべき自分がおり、第二言語学習の経験が学習者に影響を与えて、学習者は現実の自分と理想の自分のギャップを縮小するためにやらなければならないことをやる、と主張している。この学生は理想の学習者像に近づくための努力を一生懸命していたと思われる。学生たちは卒業のためにこれを完成させて合格しなければならないという、instrumental motivation（道具的動機）のもと、さまざまな学習ストラテジー（記憶、認知、補償、メタ認知、情意、社会的）、特に情意と社会的ストラテジーを駆使して現実の自分から理想の自分（卒業制作を完成させた）に辿り着こうと努力していたのであろう。

今回のアンケート調査をふまえて、今後卒業制作をさらに意義あるものに発展させるにはどうすればよいのだろうか。次の項で考察したい。

5．今後の展望

卒業制作の意義はこれまで学習したことを統括、応用し新たな作品や論文を生み出すことであるが、現状は様々な問題を抱えている。指導面では学生の態度、グループ指導、サポートの必要性であり、学生の課題は言語面と精神面についてであった。アンケート調査で顕著になった課題を今後の卒業制作にどのように活かしていけばよいのだろうか。学生側からの要望は

4点、指導教授側からの要望は1点ある。まず、学生たちが指摘したのは、1)卒業制作のオリエンテーションの開催 2)論文の書き方指導の必要性、3)図書館の蔵書の充実、4)討論室の設置である。

まず、オリエンテーションの開催についてある学生は「『卒業制作はどのように作ればいい』などのことを説明してくれるともっと作りやすいと思う」と回答している。これは学生に心の準備と卒業制作の意義を認識してもらう良い機会になるのではないかと思う。

次に論文の書き方の授業の必要性について、ある学生は「卒業制作は初めてだから、どうやってすればいいのかわからない。例:論文の形式や書き方と資料の取得方法がわからない。」と述べている。一年で書き方から資料収集の方法などを一から教えると、論文の内容指導にかける時間が削られるので、「論文の書き方」を作文の授業などで取り入れられないだろうか。

次に図書館の蔵書の充実と討論室の必要性について、学生は「うちの学校の図書館が文献が多ければ多いほどよかったと思う」と回答し、ある学生は「二技の学生は自分の教室を持っていないので、討論には不便。討論室が欲しい」と指摘している。卒業制作に取り組む環境が整っていないことも実践上の課題である。一早い環境改善が望まれる。

なお、指導教授の要望は前にも述べたように「研究方法」の必要性である。しかし、現実には制約があり解決が困難である。本学科では「教學研討會」で同じ授業を担当している教師が教材や授業内容について情報交換するが、その際に学生が卒業制作に取り組める準備ができるように連携をはかることも強く求められているのではないだろうか。

本稿では本学科での「専題制作」の取り組みについて様々な観点から述べてきたが、実践上の課題は学生が思う存分取り組める物理的にも精神的にも充実した学習環境を提供できるようにすることだと思われる。特に、学生の抱える不安や自信喪失、writing anxiety(書く不安)やモテイベーションの維持など学生の心理面のケアも考慮する必要があると思われる。そうすることで、アンケート調査から浮かび上がった課題が改善されるのではないだろうか。卒業制作で学んだことを学生に将来活かしてもらえるように、指導教授の一人として私も努力していきたい。

(Dosaka Junko　国立臺中科技大学)

参考文献

Bloom, B. S. (1956) Taxonomy of Educational Objectives, Handbook I: The Cognitive Domain. New York: David McKay Co Inc.

Dörnyei, Z. (2009) The L2 motivational self system. In Z. Dörnyei and E. Ushioda (Eds.), Motivation, language identity and the L2 self. (pp. 9-42). Bristol: Multi-lingual Matters.

Krashen, S. (1987). Principles and Practice in second language acquisition. Upper Saddle River: Prentice-Hall International.

Oxford, R. (1990). Language learning strategies. Boston: Heinle & Heinle Publishers

Wang, Y. (2012). A descriptional study on differences in L1 and L2 academic writing. International journal of English and literature, Vol. 3 (5), 112-116.

Website:

Bloom's taxonomy of learning domains http://www.nwlink.com/~donclark/hrd/bloom.html#revised (2013.2.10 参照)

Constructivism (learning theory)http://en.wikipedia.org/wiki/Constructivism_(learning_theory) (2013. 2.11 参照)

Giridharan, B. and Robson, A. (2011) Identifying gaps in academic writing of ESL students. http://www.curtin.edu.my/tl2011/download/papers/refereed/Identifying%20gaps%20in%20academic%20writing%20of%20ESL%20students.pdf (2013.1.5 参照)

Vygotsky's zone of proximal development http://en.wikipedia.org/wiki/Zone_of_proximal_development (2013.2.11 参照)

アンケート調査質問表(指導教授用)

1. どのぐらいの頻度で指導されましたか？
2. グループの指導でなにか感じていることはありますか？
3. 卒業制作、論文の指導についてどんなことを感じられましたか
4. これまで、どのような指導をされてこられましたか？
5. 卒業制作、論文の指導をして、よかったと感じられることがありましたか？
   あれば具体的にお聞かせください。
6. 指導で難しかったこと、苦労したと感じられることがありましたか？
   あれば具体的にお聞かせください。
7. 要望、課題や問題点などありましたら、お聞かせください。
8. 改善したほうがよいと思われることはありますか？あれば、具体的にお聞かせください。

アンケート調査質問表　（学生用）

1. 今回の卒業制作を日本語で行う、書くということについてどんなことを感じましたか？例も書いて具体的に説明してください。
2. 一年間、取り組んで気持ちはどのように感じましたか？例えば、面白かった、楽しかった、イライラした、挫折しそうになった、不安になったなど、説明してください。
3. 今回の卒業制作は自分にとってどのように感じましたか？
4. 日本語と中国語では書くとき同じですか？それとも違いますか？詳しく説明してもらえますか？
5. 卒業制作でおもしろかったこと、楽しかったこと、やってよかったことはありましたか？（ある　ない）あるなら、どんなことでそう感じましたか？例もまじえて説明してください。
6. 大変だったことや、難しかったことを感じましたか？（ある　ない）もしあるなら、どんなことでそう感じましたか？例もまじえて説明してください。
7. 学生の目からみて、卒業制作の課題点、問題点があると思いましたか？（ある　ない）もしあるなら、具体的に書いてもらえますか？
8. 改善してほしいことはありますか？あるなら、どんなことですか？（ある　ない）詳しく書いてもらえますか？
9. 最後に、後輩にどんなアドバイスをしたいですか？
10. どんなサポートがあればもっと取り組みやすいと思いますか？